

分身物語考

——『ジキル博士とハイド氏』再読——

杉 山 洋 子

*

分身、自分でないもうひとりの自分、自分のなかの見知らぬ自分——八分身Vはどのようにして人間の心に住みつき、物語の主人公になったのだろうか。

自分とそっくりの他者、といえば、なんといっても双子である。ローマの詩人プロータスの『ふたりメニクマス』を下敷きにシェイクスピアが『間違いつづき』(*The Comedy of Errors*, 1591)を書いた。グリムの「ふたり兄弟」はじめ、八双子Vは伝承的なモチーフで、瓜ふたつのふたりに起る誤解の連続の後真相の発見と兄弟の再会という幸福な結末に至るものだが、人違いの渦に巻きこまれて自分が何者であるかも危うくなりそうした物語は、自己同一性という重いテーマの萌芽を抱えていたのである。

ふたりが実はひとりだったとしたら、どうだろうか。『間違いつづき』のドローミオは弟に「あんたはおれの鏡だね、兄弟じゃないね」(＜:j などと気軽にいうけれど、ほんとうにそうだったら恐ろしい。泉に写った自分の影に溺れたナルシスを始め、影の分身物語はおしなべて悲劇だった。これはシャミッソーの『ペーター・シュレミールの不

思議な物語』(1814)や Hoffman の『悪魔の霊液』(1816)など、ドイツ・ロマン派のお家芸で、アンデルセンの「影法師」(1847)や Weyl の「漁夫とその魂」(Oscar Wilde, "The Fisherman and His Soul," 1888)などに語られている。

分身物語のきわめつけはなんといってもポーの「ウィリアム・ウィルソン」(E. A. Poe, "William Wilson," 1839)だろう。この短篇のモデルはスペインの劇でバイロンからポーに伝承されたものである⁵⁰。そして「ドストエフスキーの『二重人格』(1846)、『ジキル博士とハイド氏の不思議な事件』(Louis Robert Stevenson, *The Strange Case of Dr. Jekyll and Mr. Hyde*, 1886, 以下『ジキルとハイド』と略す)、ワイルドの『エリファン・グレイの肖像』(*The Picture of Dorian Gray*, 1900)、ヘンリー・ジェイムズの「友達の友達」(Henry James, "The Friends of the Friends," 1896)や「懐かしき街角」("The Jolly Corner," 1906)と並べてみると、素朴な双子の喜劇とはうって変わり、分身物語は意識の暗闇を通じて幻想の領域へとさまよいでたことがわかる。十九世紀の分身たちは分裂した人格の幻の申し子であり、ポー、ステイヴンソン、ワイルドにおいてきわだって寓意的であった。

分裂した自我の内面劇を描くには、心の葛藤を擬人法で表すアレゴリーがなじみやすい。ステイヴンソンがある夜みた恐ろしい夢をもとにして『ジキルとハイド』を書いた時、妻にそのアレゴリー性を指摘され、すっかり書き直して今の形になった⁵¹、というのは有名な話である⁵²。最終章のジキルの手記は「わたしの意識の領域で戦っているふたつの性質」(two natures that contended in the field of my consciousness)⁵³、「わたしの中の善と悪の不断の戦い」(the perennial war among my members, 57)と、自分の心の葛藤を語る。更に「その心は善悪だけでなく「多種多様で矛盾しあう個々独立した住民の集団」(a mere polity of multifarious, incongruous and independent denizens, 58)であるともジキルはいう。『ジキルとハイド』はそのように複雑で捕らえがたい同一性なるものの闇を抱えた作品なのである。

*

『ジキルとハイド』があまりにもポピュラーになりすぎたことは、ある意味で作品にとっても、そして読者にとっても不幸なことである。作品にとってというのは、探偵小説仕立て、SFふうゴシック調の一般読者受けのよい読み物という印象が先立つのか、どうも批評の対象になることが少なかった。しかし、改めて精読すると、これは単純なものであるのではなく、意識無意識の迷路のような構造を持つ作品なのである。そこで今、再読を試みる。

読者にとっての不幸も実は相当のものだ。タイトルの言葉そのものが八二重人格Vの別名になるほどストーリーが知れ渡ってしまった今では、たいていの読者は読む前からジキルがハイドと同一人だったという、奇怪な謎の答えを知っている。だから、ラニョン博士の生命を萎えさせてしまったほどのあの衝撃的な初体験を楽しむこともできなくなってしまった。『ジキルとハイド』は何度も映画化されたが、一九四一年にハリウッド製の三つめのをみたボルヘスは、そのお粗末さにあきれながら、次のように書いている。「原作ではジキルとハイドが同じ人間だということは驚きであって、このことは九章の最後まで伏せておかれる。読者はハイドとジキルが同一人だとは気づかない。タイトルとて、彼らは当然ふたりだと思わせるものだ⁶⁾。」ボルヘスがみた映画、そしておおかたの『ジキルとハイド』の映画は申しあわせたように、別人としか見えぬはずの兩人をひとりの主役が演じるだけでなく、変身薬の発明まで最初に明かしてしまうというふうに、原作の構造を無視している。

出版当時、読者、批評家の反応もこの一点に集中した。薬による変身の荒唐無稽さにとまどう批判の声もあった⁶⁾。だが、喜んで不信を一時停止する (willing suspension of disbelief) のは、読者たるものの掟であり特権である。似ても似つかぬふたりが実はひとりだったという途方もない奇想は、読者を驚愕させおおいに楽しませた。また当時の

書評は、まだ読んでいない読者のためにハイドの謎を隠したままに留めてあととは読んでのお楽しみ、とするなどの心くばりをみせている⁽⁹⁾。九章の終わりになってやっと、ほとんど不意打ちのように出現する変身という真相こそ『ジキルとハイド』の核心であることはいうまでもない。しかしまた、分身の謎の答えをラニョンの手記で知らされた後には、ジキル自身が密室で書きつづる最終章が用意されていて、この部分こそ読者をもっとも知りたい秘密を隠しているのである。しかも青ひげ城ならぬジキルの実験室の秘密のドアは、ひとつどころか、二重、いやもっと多重で堅固なのかもしれないのだ。

分身の秘密について、さらに探ってみなくてはならない。

ジキルの断末魔の変身の場面がステイヴンスンの夢から生まれたことはあまりにも有名である。ある夜、白い粉薬をのんでジキルがハイドに変わる夢をみた。うなされて物凄く恐怖の叫びをあげて妻に起こされ「すばらしく怖い話の夢をみていたんだ」と言って、三日で原稿を書きあげた。妻の意見に従ってさらに三日で全部書き直し、あと六週間かけて完成したという⁽¹⁰⁾。

ステイヴンスンは幾晩も続けてシリーズで夢をみるくせがあつたそうだ。そのような夜と昼二重の生活を持つことを悩み医者に相談した結果、阿片の服用で夢の世界を消すことができたという⁽¹¹⁾。子どもの頃から大そう病身だったので薬づけの生活だっただろう。薬物と変身を結びつけて考えると、麻薬——阿片、今ならLSD、クラックはまさに人格を解体してしまう。当時阿片はごく普通に医薬として使われていた。物語のなかでハイドは第三者の目にも実在するからジキルの主観的妄想ではない、という一点を除けば、ジキルの白い粉薬は人格を変えてしまう麻薬とも読めそうだ、始めてハイドになった時のあのうきうきした解放感、後になってもうやめようと固く決心したのに、あの野放図な自由の誘惑に負けてまた手をだしてしまつては暴力が爆発する——まるで麻薬常用者の転落の告白を連想してしまう。しかし、ハイドへの変身は悪夢でも妄想でもなくて、この恐怖ファンタジーの核となる出来事なのであ

る。そういえば、中世医学に情熱を捧げたジキル博士は、ファウストやフランケンシュタインと同じく科学者というよりはその前身である魔術師に似ている。伝承の変身物語において、変身はすべからず魔法のなせる技であった。古代ローマの魔法物語、アプレイウスの『金のろば』から現代のSF『蠅になった男』へと流れる無数の変身譚は人間と動物の入れ替わりを物語る。『ジキルとハイド』はその水脈に棹さしつゝ、ハイドが類人猿に似ているにしろあくまでも人間であるという点で全くおもむきを異にするのである。

変身譚に分身物語を重ねあわせたところに『ジキルとハイド』の独創がある。分身は、文学作品でも、二重体のような精神医学的症例でも、本人そっくりの姿というのが定石である。ウィリアム・ウィルスン、ドリアン・グレイ——かすれ声だったり、日々墮落をあらわに変貌してゆく肖像であっても、分身は一卵性双生児のように似ているものだ。マーク・トウェインに「コネティカット州で最近おこった犯罪騒動に関する真相」(Mark Twain, "The Facts Concerning the Recent Carnival of Crime in Connecticut")^⑧というおもしろい短篇があつて、語り手の分身はご多分にもれず△良心▽である。良心的な人ほどその分身も大きく、政治家や出版屋のは目にみえぬほど小さいのだそうだ。△わたし▽の分身は背丈二フィート、ひどく醜いのに全体としていやになるほど△わたし▽に似ている、ずるそうな目つきをしている、他人には見えていない、あんまり口やかましくてうるさいので捕まえて殺してしまつたら、良心の歯止めを失つた△わたし▽は殺人、放火、したい放題暴れまわつてせいせいした、という話で、夜の街でステッキを振りあげて暴力をふるうハイドを連想させる。しかし、この分身はいやになるほど当人そっくりなのである。ジキルとは似ても似つかぬ分身ハイドというのは、やはりただならぬ夢想の産物といわねばならない。

鏡のなかの自分でない自分——ジキルは命をかけた最初の実験に成功して、「なにか異様な、いいようもなく新鮮で、その新鮮さゆえに信じがたいほど甘美な感覚」(⑨)を味わいながら鏡を覗くと、「不具と退廃の核印」もあらわな悪の化身ハイドの姿を見た。ボルヘスは△分身▽をもてあそぶことがことさら好きな作家だが、朝起きて、ひげを

剃ろうとして鏡を見ると自分でない誰かの顔がこちらを見ている、これこそもっとも恐ろしい幻想ではないか、といっている⁵⁰。ラフカディオ・ハーン「茶碗のなか」(Lafcadio Hearn, "In a Cup of Tea")は、茶を飲むとして茶碗のなかに見知らぬ顔が写っているのを見た男の話である。ハーンは怪談の名人らしくこの話を尻切れトンぼで終わらせて、空白の恐怖をたっぷり読者に残してくれている。

十九世紀イギリスの怪談『ジキルとハイド』において、ジキルとハイドは似ても似つかぬふたりでなくてはならない。化けの皮を剥がされて正体がばれてしまうような仮面や変装ではだめなのだ。当時の裕福な学者らしく、ジキルの自宅には書斎だけでなく実験や解剖のための階段教室 (theatre) がある。この theatre (劇場) という言葉は、快楽のためにジキルが「一気に著名な学者の肉体を脱ぎ捨て、厚いマントのようにエドワード・ハイドの肉体をまとう」(62) ことからしても、衣装をとっかえひっかえする役者の変身を連想させる。ジキルの理論によれば「われわれが着こんでいるこの見るからに堅固な肉体」(this seemingly so solid body in which we walk attired) は、実は「頼りなく実体なきもの、霧のごとくはかないもの」(the trembling immateriality, the mist-like transience, 59) なので、衣装のように脱ぎ着できるといのである。ジキル博士の二元論をここで追求するのはおくとして、十年余りかけた研究の目的は変装でなく似ても似つかぬ者への変身だった。

ジキルが「純粹悪」であるハイドを分離させたのは、最終章の手記で自ら述べるように、異常なまでに世間体 (re-spectability) を重んじたためであった。財産、身分、学者としての才能に恵まれたジキルは「抑えがたく享樂的な性向」(a certain impatient gaiety of disposition, 57) の持ち主でもあった。そして、人一倍野心家だったので「尊大にかまえ、人前では威厳を保っていた」という強い欲望と享樂癖の板挟みになって苦しんだ、という。このままでは、公私相いれない二重生活を「改革改善することはもはや絶望的だと知っていた」。(62) 薬物依存は恥部を世間の目から隠すための窮余の策であった。ジキルのアブノーマルなまでの道徳的ジレンマが、ヴィクトリア時代の精神風

土をよく象徴するものであることはしばしば指摘されてきた¹⁰⁾。制度に反するものはなんでもおおい隠してやり過ぐす。Hyde 氏の hide はまさに霧深い大都會の心のキーワードであった。エドワード・ハイドは、紳士ジキルの悪事の秘密を確実に守りおおせる隠れみものとして企まれた。『ジキルとハイド』が探偵小説仕立てであるのは非常に興味深い。ジキルとハイドをめぐる謎を探り、あばいて、結末であますところなく真相を差し出して見せる、というミステリーの方法がここではたしてうまく機能するのだろうか、探ってみる。

『ジキルとハイド』は章番号なしの十の部分からなり、それが三種類の語りに分かれている。最初の八章は、ジキルの友人でまた弁護士であるアタスンをおおむね視点人物とする三人称語りで、ミステリーをジキルⅡハイドの自殺まで追ってゆく。その過程で手掛りが全くないわけではないが、だぶだぶの服を着たハイドの死体を確認しても、ふたりが実はひとりだったという真相は隠されたままで、謎の解明はアタスンが続いて読む二通の手記を待たねばならない。答えはさらにアタスンに宛てられた「ラニオン博士の手記」の最後まで持ち越される。ラニオンはハイドが目の前で薬を飲み、断末魔の死の苦しみの中からジキルに生まれ変わるのを目撃した唯一の人物であり、そのあとでジキルから一部始終を聞かされた。その同じ話を書き綴ったのが、アタスンが次に読むジキルの手記である。

ジキルの手記は全体の四分の一を占め、先行する四分の三の出来事を説明し裏づけるとともに、めんめんたる自己分析をそえるものである。そして、ジキルの存在がじわじわと、やがて急速にハイドに侵入され占拠されてゆく危機的な状況のさなかで、書き手がジキルでいられる限られた時間を盗んでは最後の力をふりしぼって書かれた。

ジキルの手記は、作者の恐ろしい悪夢から座み出されたこの物語のなかで最も恐ろしい部分である。たとえば、ある朝、気持ちよくまどろんでいてふと手を見ると「ロンドンのどまん中の黄色い朝の光のなかで、軽く握ったかたちで夜具の上に見た手は、やせて筋ばって節くれだち青黒くて、黒い毛がびっしり生えていた。それはエドワード・ハイドの手であった」(64)という場面。急速に力を増してきたハイドが薬なしで現れるようになり、真昼間リージェン

ト・パークのベンチで日向ぼっこしていると「めまい、ひどい吐き気と恐ろしいふるえ」(88)がきて、ジキルはハイドに変わっている。ジキルは薬の量を次々と増やしてハイドになるまいとするが、ハイドに全人格を乗っ取られるのは時間の問題となる。入れ変わりがち変わり変身する両者の格闘となる最後の修羅場。手記はそうしたことを始めて明らかにするのだが、そういえば擬人化されたハ内面の葛藤Ⅴがこのような迫力をもつのは、まさに一人称語りの特権なのである。

この手記をジキルは「わたしの告白」(my confession, 74)とつい、手記につけられたタイトルは「本件に関するヘンリー・ジキルの全面的陳述」(“Henry Jekyll's Full Statement of the Case”)となっている。「告白」は個人的なものの、「陳述」あるいは供述は法的な呼称で、それも「全面的」とある。ここで再び一人称語りについて考えてみると、「わたし」ひとりの語りというものは、客観的に、「全面的」に、「わたし」のことを語れるものではない。あいまいだったり、自己弁護的、ひとりよがりや、告白のはずがまだ隠しごとをしたりしていて、そこがこの技法のうまみなのだ。『ジキルとハイド』の構造は、まず三人称語りで謎を追ひ、一人称語りのふたつの手記に、変身という信じがたく非現実的な秘密を明かさせたところで結末とするものである。繰り返していうが、主人公の薬物による二重人格的変身はこの怪奇ファンタジーの核であって、この秘密なしにこの作品はありえない。だからこそ、その途方もない秘密を一人称語りの密室に閉じ込めたまま、ドアを閉ざしてしまつて、二度とふたたび三人称語りの客観の目にさらすことをしない——そこに作者の巧みがあるのだ。

ジキルの陳述が語り残した部分があるとしたら何だろうか。先走って言えば、それはまさにハイドの部分ではないだろうか。ジキルとハイドはひとりであるのに、手記では対立しあう別々の人格として描かれる。手記のなかで、書き手であるジキルがハイドに使う人称は一貫していない。始めの頃、ハイドになったジキルは「わたし」であるが、ハイドの力が増大して手に負えなくなると、ハイドは「彼」となる。最後のおぞましい攻防戦になると、ハイドは全

く敵なる他者のごとくになる。ハイドは「彼」であるから、ジキルの告白の外に在る。これは、ハイドの分の告白をできるだけ避けようとする偽善者ジキルの逃げ、隠蔽でもあることに注目したい。

ハイドは何人もの人に見られている。アタスンの友人エンフィールドはこの悪魔のような男が夜中の街で少女を踏みつけて歩いていくのを見た。町医者も見た。アタスンは待ち伏せていて「あなたの顔を見せてください」といつて、よくよく見た。

ハイド氏は青白く矮小だった。どこが奇形というわけではないのに不具者の印象を与える、不愉快な笑い方、弁護士にむかつて憶病と大胆さの入り混じったなにか殺気だった態度だった、そしてかすれ声でささやくように途切れがちに喋る——すべてこの男にとってマイナスなのだが、これを合わせてみても、アタスン氏がハイドを見てから感じていた得態の知れない胸の悪さ、嫌悪、恐怖はどう説明しようもないものだった。(11~12)

やはり夜中に、窓からカルー殺害の現場を目撃したメイドもハイドを見知っていた。勿論ラニオンも「非常に活発な筋肉と見るからに貧弱な体格にその顔の物凄いい形相——それよりもなによりも、そばにいただけで心底平安を乱されてしまう」(53) この男を見た。そして、ジキルも鏡のなかのハイドを見るのだが、「嫌悪感はなくてむしろ喜んで歡迎する気持ちだった。これもまたわたし自身なのだ。それは自然で人間らしく思えた。これまで自分の顔と呼び慣れていた不完全な釈然としない顔よりも、いきいきとした精神を表し、ずっときつぱりとしていて純粹に、わたしの目にはうつった」(61) という。

ハイドの凄まじい悪行も人に見られている。少女を踏んだ時も、カルー殺害の時も、ラニオンの前で薬を飲んで変身して見せた時も、きつと見られていて、ジキルの手記もそれを裏書きしている。しかも暴力をふるうハイドは「わたし」ではなくて「彼」である。ふたりは「記憶を共有する」(66) ので、ジキルはハイドであった凶暴な時間を思い起こすことができるが、それをあくまでもジキルとして想起し、書くのである。ジキルがハイドの視点で書くことは

ない。というわけで、ハイドはその名のとうり物語の奥に影のように隠れてしまうのである。

ハイドの悪事について、手記は語りたがらない。ジキルがなによりも重んじた八世間体Vの陰にハイドは隠れている。ジキルは繰り返して「わたしの快楽」、「悪行」、「恥」、「墮落」という。だが、それは抽象名詞にとどまり具体的に何であるかは黙して語らない。「わたしが姿を変えてまで焦り求めた快楽は、先に述べたとうり、威厳を損なうようなものだった」(63)。「わたしがこのように黙認してきた(というのは今だに自分がそのようなことをしたとは認められない)破廉恥行為の詳細に立ち入るつもりは毛頭ない」(63)、とジキルはいう。それはすべて分身ハイドの仕業である。恥を隠し世間体を保つためにこそあの命がけの大発明をしたのではなかったか。

ジキルは「大柄で、均整のとれた、ひげのない五十格好の紳士で、どこかずるようなところもあるが、見るからに有能で親切」(17) そうだ、と語り手は描写する。²⁴には「なにくわぬ顔で」、「秘密を隠して」の意味があるのはいうまでもない。ジキルはラニョンあての手紙に「君を助けるためなら、僕の財産でも、僕の左手でも犠牲にしよう」(49、傍点筆者)と書く。なぜ、右手でなく左手なのだろう。利き手である右手まで犠牲にはしたくない、というのだろうか。また、*left-handed* には「両手利き」、「ふた心のある」といった意味がある。こうしてジキルはおのれ自己中心主義と偽善をわれしらず暴露していることになる。ハイドの「快楽」、「悪行」が具体的に何であったかは、ウィリアム・ウィルスンやドリアン・グレイの場合と違って、読者には隠されたままである。そして、ステイヴンソン自身が明瞭に書いているように、ジキルの放蕩癖や悪行が悪いのではなくて、それを隠そうとする偽善こそがハイドの悪業の根源なのだ²⁵。このことを、ジキルの手記は八隠すVことにかえって暴露しているのである。

そういえば、八世間体Vゆえの沈黙、抑制は『ジキルとハイド』全体にゆき渡っている。

冒頭の「ドアの話」(“Story of the Door”)は、第三者としてこの事件に終始関わった弁護士アタスを、読者に紹介することから始まる。アタスはジキルとラニョンの長年の友であり、惨殺された老紳士、サー・カルーの弁護

士でもあるというふうに、登場人物同士をつなぐ人である。また事件の破局のあとでふたつの手記を読み、Uterson という名が示すように一部始終を公けにする人である。弁護士だから、制度の守り手であり、かつ掟に背いたカインの末裔たちにも同情があるという。このいわば模範的な人物はひどく禁欲的である。「彼は自分に対しては厳格であった。ひとりの時には、ワインを嗜みたいのに自制してジンを飲んだ。芝居好きなのに、二十年来劇場に行ったことがない。」(「傍点筆者」)

アタスンはジキルと同様五十代の独身者である。ラニョンもそうなのかは言及がないが、いずれにせよ、健全な常識人である二人の紳士は、奔放で自己中心的なジキルの対極である。ジキルの逸脱がもとで三人の友情は崩壊した。よく指摘されるように『ジキルとハイド』は女性ばかりの男性だけの物語である⁴⁰。女性の登場人物といえるものは無きに等しく、あえていえば、ハイドに踏まれた少女、その母親と近所のがみがみ女たち、ハイドのソーホーの住まいのしたたかな家政婦、その近所の商売女、ハイドにわけもなく殴られた女、などだが、簡単な描写がそれぞれにきわめて暴力的である。

奇妙なことに唯一フェミニンな描写といえば、日曜日にアタスンとエンフィールドが散歩の道すがら眺める街のたずまいである。それは繁華街の裏通りで、

通りは狭く、まあ静かといえたが、平日はよく賑わっていた。住民はみな裕福そうだが、みな更に商売繁盛をめざして、余分の儲けで店を飾りたてていた。だから、ずらりと並んだ店は、笑顔の女売り子たちが勢揃いして客を誘っているように見えた。(2)

この描写はもっと続いていて、「華やかな魅力ヴェールに隠して」、「化粧直しをしたてのシャッター」などと店の様子を描き、「あたり一帯のこざっぱりと陽気な感じ (gaiety of note) がすぐに通行人の目を惹き、楽しませた」

(2) とある。

そして、この通りを入ったところにハイドが出入りするドアがあり、それは実はジキル邸の裏口なのであり、ジキル自身は広場に面した上品で立派な表玄関^{「スベクラール」}から出入りする。家もその住人と同じくふたつの顔をもっているのである。その家にはマリアもマルタもない。妻も母もない。

ハイドはカルー殺害犯として追われる身となり、やっと自分を取り戻した時ジキルはひざまずいて神に祈る。すると「放埒のヴェールが頭のでっぺんから爪先まで裂けて、自分の人生がすっかり見えた。父の手にすがって歩いた子どもの頃、学者としての苦しい克己の生活」(68)を思い出す。なぜ「父」なのだろうか。「父」とは、ジキルが手を合わせて祈る父なる神の比喩でもあるのだろうか。その後、破局を前にハイドは怒り狂って「わたしの父の肖像画」(73)を破壊する。ジキルの人生のパノラマ記憶のなかに母は不在とみえ、語りは母について沈黙する。

『ジキルとハイド』は父と子の物語でもあるのだ。ジキルとハイドは身体の大きさもひどく違う分身同士なのだが、それというのも、ジキルはハイドの父なのである。鏡の中のハイドと初対面の瞬間からジキルは醜悪かつ邪悪なハイドを歓迎した。「ジキルは父親以上の関心を持っていたが、ハイドは息子以上に無頓着だった。」(66)自分の利益のためとはいえ、ジキルはハイドを遺産相続人とすべく遺書を作る。そういえば、このふたりの名前にしても寓意を隠している。ハイドについてはいうまでもないが、エドワードの原義は「裕福で幸福な被後見人」(OE Edward: ead rich, happy + weard ward, guardian)。Jekyll は、これもすぐ気づくように「自分を殺す者」^{「ヘンリー」}。ヘンリーは「家長」(G Heinrich: heim home + riht ruler)を意味する。出現した時は矮少だったが、「最近ハイドの身体は大きくなり、(ハイドの姿になっている時)血液の循環もずっと豊かになっているような感じだった。」(66)放蕩息子は成長し、父を圧倒し、暴力的に父の座を侵しはじめたのである。とすれば、これもまた、オイディプス以来の父殺し——ハイドが抑圧された人自然の比喩だとすれば、制度にこびる偽善者の家長ジキルへのおぞましい復讐と自滅の

物語といえようか。ハイドは八世間体Vを公衆の面前で踏みにじることができた最初の人間だったと読むこともできるのである³⁹⁾。

さて、そもその始めに、ジキルは、神がアダムを創ったように、アダムからイヴを取り出したように、ハイドを出現させたのであった。変身の薬を飲むと、

物凄いい拷問の苦痛がやってきた、骨が砕ける、ひどい吐き気、生まれる時、死の時をも凌ぐ魂の恐怖。そして苦痛が速やかにおさまり、わたしは大病からたち直ったように意識を取り戻した。(59～60)

これは、臨終の恐怖、生まれ出る胎児の苦痛、そしてそれよりも出産の苦しみではないだろうか。ジキルがハイドの父であるだけでなく、母であることを暗示する言葉がいくつかある。分身は始め、ジキルの「苦悶する意識の胎内」(the agonized womb of consciousness, 56)に宿っていた。ジキルは、ハイドが法の手を逃れる山賊のように隠れ潜むことのできる「洞穴」(the cavern, 66)だった。「手記」は続ける。

そしてまた、あの恐ろしい反逆の徒は、妻よりも、目よりもしっかりとジキルに結びつけられている、ジキルの肉体の檻の中に閉じ込められている、眩くのが聞こえる、生まれ出ようとして暴れているのを感じる。(73)

ジキルは分身としてハイドを分離した。多くの分身物語にみるように、ハイドはジキルの邪悪な影なのだが、ステイヴンスンの作品で影は本体と似ても似つかぬ他者、しかも八息子Vである。そのうえ、ジキルはハイドの父と母との二役まで演じてしまうのである。先に、母の空白について指摘した。ジキルの「告白」はハイドを隠し、母を抹殺する。なぜ、母を消すのか、推理の手掛りはない。ミステリー仕立てなのに、アタスンは探偵でなく、ジキルを裁き弾劾せず、友人の悲劇を恐れ、哀れみ、読者に対しておそらく弁護しているのである。そして、一応の謎を説明陳述しながら、その言葉の陰にさらに深い秘密を隠したまま、すべての語りに終止符がうたれた。それゆえに、この十

九世紀の分身物語は不思議な謎の余韻を残して、読書の快楽を深めることとなるのである。

*

ステイブンソンの『ジキルとハイド』から一世紀と少し経って、最近、Emma Tennant, *Two Women of London: The Strange Case of Ms. Jekyll and Mrs. Hyde* (Faber, 1989) が出たことをつけ加えておこう。タイトルでもわかるように、これはポストモダン好みのパロディで、ヴィクトリアニズムの向こうをへった女性版分身物語である。こちらは探偵小説仕立てに代わって、カラーージュ写真、ヴィデオテープ、カセットテープ吹きこみの遺言、などを編集構成したという形をとっている。主人公はミセス・ハイドのほうで、夫に捨てられふたりの子どもを抱えてはじめに老けこんでしまっている。ハイドはいかがわしい医者、薬で限られた時間だけ昔の面影をとり戻し、ミズ・ジキルとして画廊のマネジャーの仕事を手に入れる。登場人物は医者も弁護士も、ヴィデオ製作者も女性である。ミセス・ハイドはミズ・ジキルの持ち物であるオウムの柄のついた傘で、近所を徘徊する暴行常習犯を殺害するが、目下逃亡中、イギリスといわず世界じゅうあちこちに出没しているようだ、というのである。

このように、フェミニズムもあらわなあら筋を述べるとなんだか実も蓋もないけれども、パロディとは先行する作品、それを生んだ文化の批評であり、今のここに視点をすえたひとつの解釈、読みである。『ジキルとハイド』を再読した後、現代の読者の多くは、意識的にあるいは潜在的に、好き嫌いをこえて、多かれ少なかれ、テナントの読みを、恐れつつも受容する。

註

- (1) オットー・ランク『分身・ドッペルゲンガー』（人文書院、1988）、3～28。

- (2) E. A. Poe, "William Wilson," *Collected Works of Edgar Allan Poe*, Vol. II. (Harvard Univ. Press, 1978), 422~25.
- (3) James Pope Hennessy, *Robert Louis Stevenson* (Jonathan Cape, 1974), 180.
- (4) Robert Louis Stevenson, *The Strange Case of Dr. Jekyll and Mr. Hyde* (Heinemann, 1924), 58. ekyll and Mr. Hyde
- (5) Jorge Luis Borges, "Dr. Jekyll and Mr Hyde Transformed," *Borges: A Reader: A Selection from the Writings of J. L. Borges*, ed. by E. R. Monegal & A. Reid (E. P. Dutton, 1981), 140.
- (6) John Herdman, *The Double in Nineteenth Century Fiction* (Macmillan, 1990), 132.
- (7) Paul Maixner, ed., *Robert Louis Stevenson: The Critical Heritage* (Routledge & Kegan Paul, 1981), 202~3, 229. *ibid.*, 200.
- (8) "Prefatory Note by Mrs. R. L. Stevenson," R. L. Stevenson, *op. cit.*, xvii~viii.
- (9) J. P. Hennessy, *op. cit.*, 180~81.
- (10) Mark Twain, "The Facts Concerning the Recent Carnival of Crime in Connecticut," *Tom Sawyer Abroad*, *Tom Sawyer, Detective & Other Stories*, (P. F. Collier & Son Co., 1917), 320~25.
- (11) J. L. Borges, "Borges and I", "The Other", *Borges: A Reader*, 278~79, 321~26.
- (12) Irving S. Saposnik, *Robert Louis Stevenson* (Twayne Publishers, 1974), 89~94.
- (13) R. L. Stevenson: *The Critical Heritage*, 231.
- (14) Masao Miyoshi, *The Divided Self: A Perspective on the Literature of the Victorians* (New York University Press, 1969), 299.
- (15) Karl Miller, *Doubles: Studies in Literary History* (Oxford Univ. Press, 1985), 213-14.
- (16) M. Miyoshi, *op. cit.*, 300.
- (17) I. S. Saposnik, *op. cit.*, 99.